

## 学校での「コミュニケーション教育」を目的として芸術家が進行する 演劇的手法を活用したワークショップ (JASEC 第 32 回年次大会シンポジウム報告)

平 田 知 之  
(芸術文化観光専門職大学)

兵庫県豊岡市では、2017 年からコミュニケーション教育の一環として市内全小学校 6 年・同中学校 1 年に対して演劇的手法を取り入れた授業を担当教員が、2023 年から市内全小学校 1・2 年に対して非認知能力向上のための演劇ワークショップをプロの演劇人が、実施している。それぞれ専門家の監修のもと、市教委が学習指導案を作成している。

ここでいう演劇とは「演者が他者になって観客に向けて表現し、観客が想像する行為」であり、俳優が台本に沿って劇場で上演するものであるという世間の認識よりも幅が広い。

豊岡市は、小中 9 カ年を通して「めざすコミュニケーション能力」として「他者理解」「自己認識」「他者との協働」「表現活動を取り入れた課題への取り組み」の 4 つの視点を挙げている。4 点目については、「対話やディスカッション、身体表現等を活動に取り入れつつ、正解のない課題に取り組む」としている。一方、小 1・小 2 の非認知能力ワークショップ（以下、WS）では、「やり抜く力（自己効力感）」「自制心」「協働性」の三つの力の向上を目指している。前者は言語コミュニケーションと非言語コミュニケーションをほぼ同等に扱うが、後者は、コミュニケーション能力のベースになる、ペーパーテストでは計れない力（ここでいう非認知能力）の向上を目指している。

このような能力の効果測定は、参加者や担任の先生に心理学に基づいた尺度を用いて質問紙調査をすることが多い。たとえば「友達の前で恥ずかしがらずに発表できる」というような小項目ごとに 7 段階で自己評価をつけ、統計処理をするという類の調査である。

しかし個々の児童生徒の中で起きている学習はもう少し複雑である。WS の 1 回目のプログラムは、「四角い枠（舞台）の中に入ったら、なりたいものに変身できる」という活動を中心に構成されている。その時の児童の状態は、「最初から手を挙げて 1 人で変身できる」者から「教室に入ることができない」者まで 10 段階のグラデーションがある。スタート地点の状態が違うのに、共通の尺度だけで測定をするだけでは不十分である。机と椅子という拘束具がない WS では、児童が発する情報は通常の授業に比べて各段に多い。しかも、WS 中のできごととは教室の至る所で同時多発に起こるので、一人で全てを見取することはできない。豊岡市の WS は、主講師 1 名、サブ講師 2 名に加えて、担任教員、指導主事（時には管理職や大学教員）も参加して、児童の状態を複数の眼で観察している。実施後には全員で WS を振り返り、対話の中で児童の状態の変化（評価）を構成的している。

コミュニケーションとは何かについては、さまざまなモデルがあるが、ワークショップ（ここでは一般的なそれを指す）で起きているコミュニケーションは、情報伝達を主とするいわゆる導管モデルではなく、参加者の対話によって何かを産み出す構成的モデルに基

づくそれである。ワークショップの場で起きている学習も、教師が生徒に知識・技能を移転する、いわゆる合理的学習モデルではなく、その場にいる参加者で知を生み出していく構成的学習モデルである。ワークショップの評価が個人の内省による質問紙調査だけでは不十分で、参加者総合による評価の構成が必要になる所以である。